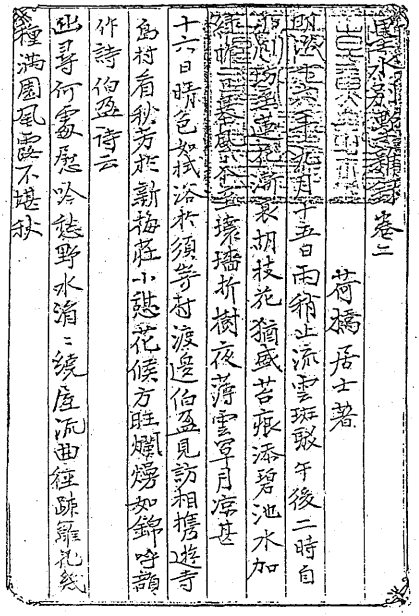
依田学海の漢文体日記

―韓国々立中央図書館蔵『墨水別墅雑録』『墨水雑録』について―

今井　源衛



『墨水別墅雑録巻二』巻頭

はじめに

私は昭和五十八年三月より一か年間、韓国ソウル市に出張し、その地の韓国外国語大学校研究科で授業をしたが、その間に関係諸機関の御好意を得て、ソウル大学校、国立中央図書館等所蔵の日本文学関係図書を若干調査することができた。

ここに紹介しようとする依田学海の日記は、そのうちの一つである。

該本は、右の国立中央図書館蔵書である。同図書館は、ソウル市南山の西端頂上に在在、その蔵書中には、日本植民地時代の旧朝鮮総督府図書館の蔵書数万冊がほぼそのまま収蔵されており、その目録も整備されている。

その事を、私はソウル着任後間もなく、当地の誠信女子大学教授森田芳夫氏より教えられ、同氏及び日本大使館員の斡旋の下に、四月中旬に同館を訪れ、まずその蔵書目録を拝見したのであった。「外図国書目録」四冊中に占める和書の圧倒的な量に、私は圧倒されたが、ともかくもと、目を通し、メモをとってゆくうちに、四月下旬であったか、

依田学海草稿　古五―三一―八　全七冊

という文字が目に入った。「草稿」といえば、自筆の可能性が大きく、また七冊は量も大きい。学海は、坪内逍遙より一歩早く現れた明治初期の漢学出身の文学者である。その創作にかかる小説や劇も

いくつかあるが、むしろ歌舞伎界の旧弊を打破しようと試みて、川上音二郎などと共に演劇改良運動をいわゆる壮士劇の形で大胆に推し進めたが、そのあまりの過激さに、時代に受けられず、劇団からも背を向けられてしまった人として知られている。ともかくも一見に値すると気持が動いて、現物を出してもらって見ると、案の定、学海の自筆日記にまちがいなかった。その並々ならぬ達筆のほどと、至るところに見える乱暴なといってよいほどの加筆推敲のあと、また楷・行・草の入り乱れた字体、多くの書入、補入などは、とうてい後人の写でないこと一見して明らかであった。（後に私は無窮会文庫所蔵の多くの学海自筆本を照合し、両者同筆であることを確かめることができた）

また、その内容を走り読みするだけで、顕しい数の明治十年、二十年代の文人の名が見えた。私は、自分の専門領域とはかけ隔っていることに、ためらいも感じたけれど、種々の条件を考えれば、この機を逸すれば、この日記が世に紹介されることは当分望みうすになりそうな気がしたので、意を決して、その翻字、翻刻を思い立ったのであった。

以後一年半にして、昨今、多くの難読個所を残しながらも、ともかくもいちおう全巻の作業を終了し、翻字および訓み下し文共で計四〇〇字詰原稿用紙一二五〇枚に達した。

以下に本書の性格・内容についてごく概略を記してみたい。もとより素人のわざで誤りも多いことと思う。ことに当時の文壇一般の情勢には昏いので、記述はほぼこの新資料に即したものに限定し、それ以外の資料との係わりについては、後日、より適当な方々によってより詳細に敷衍されることを期待する。

一

まず本書の書誌を説明する。

函架番号は前記の通りであり、また旧朝鮮総督府図書登録番号は、「古一四九八〇」、昭和十三年七月五日の登録であることは、第一冊の表紙の見返しに押された登録印によって判明する。その購入、又は入手先は不明である。全七冊の内訳は、

墨水別墅雑録二　半紙本一冊　十行罫紙
明治十六年九月十五日～二一年八月十五日。一〇〇丁。
墨水別墅雑録三　中本一冊　十行罫紙
右に続き二十四年七月十四日まで、八九丁。
墨水別墅雑録四　半紙本一冊　七行罫紙
右に続き明治二六年六月二十一日まで、四七丁。
墨水雑録（一）　中本　一冊　八行罫紙
右に続き明治二十九年三月十六日まで、九七丁。
墨水雑録（二）　中本一冊　十行罫紙
右に続き、明治三十二年十二月三十一日まで、七三丁。
漢文読本　中本二巻一冊
学海剰稿　半紙本一冊

この中漢文読本以外はすべて学海自筆である。最後の二冊は日記ではない。「漢文読本」は、学海が仙台の渡貫恵雲の協力を得て編輯した教科書原稿かと思われる（無窮会文庫本『学海日記』明治三三年七月二四日条）が、「廃物」と異筆で記されているところでみれば、これは教科書には採択されなかったものと見える。

また「学海剰稿」は、明治十九年より二十二年に至る間の彼の友人、菊池三溪・関根痴堂・小山春山・杉浦梅潭・山田新川・村山拙軒・中根香亭等の詩文を集録したものである。その二冊は今、除いて、「墨水」を冠した五冊が日記であり、当面それだけを取り上げることにしたい。

その書誌についてさらに補足すれば、装釘はすべて袋綴、用紙は楮斐とりまぜて、概して上質である。冊によって異るが、凝った草木文様や雷文繋ぎ文様を以て枠を飾るなどしている。

各巻とも、前述の如く楷行草を混用し、朱・墨による訂正・加筆・朱点が多く、殊に詩は推敲の跡が著しく、時に難読を免れない。頭欄外にはしばしば細字による書入が見られるが、その性格は、小見出し・訂正・補筆・加注などさまざまである。また本文の記述は、おおむねは日ごとに執筆したらしいが、中には、日付を改行せず、前日条下に追込みで書き続けることがあり、必ずしもその日その日の執筆とも限らないようである。また後日追記であること歴然たる個所もあるが、それが稀には本行の中にその旨記されていることもあって、その前後の執筆の時点について判断に苦しむ場合もある。

また以上五冊の中には、第一巻に当る「墨水別墅雑録一」は見当らない。後述の如く、この別墅を設けたのは、学海自身明治八年といっているので、この雑録はそれ以後に記しはじめたものであること明らかだが、第二巻が明治十六年九月から足かけ五年間、第三巻が足かけ四年間であるから、おそらくは第一巻は明治十一・二年ごろから書き始めたものであろうか。

因みにいえば、無窮会文庫中には、依田学海の自筆日記全四十四冊が存在することは、早くから知られており、既に諸家によって、近代文学研究の宝庫とされているのである。[1] 関良一氏[2]によれば、右の無窮会文庫本は安政三年二月に始まり、明治三十四年二月二十七日に終る。この中、この韓国国立中央図書館本に見える明治十六年から同三十二年十二月に至る範囲は、無窮会本では十七冊に収まっている。私の一見したところでも無窮会文庫本の書型も大小さまざまで半紙本、中本・横本を交えて、文字も極端な細字もあり、内容の密度は一概には論じにくいが、概して記事の量は無窮会本の方がはるかに多い。

しかし、こうして少くとも明治中期十数年間にわたって、学海は二種類の日記を平行して書き続けていたことは明らかである。

また、無窮会本はその明治以前の初期は純漢文体が多いが、中期以後にはほとんどすべて和文体に変っているのに対して、韓国本は終始一貫純漢文体である。書誌的なことは大体以上である。

二

「墨水別墅」とは、彼の向島の別荘である。学海は明治七年四月向島須崎村の尼寺青雲軒に寓し、翌八年四月にその地に自邸を建てた。自筆の「学海先生一代記」には、その絵に添えて「柳蔭精廬を築きしは明治八年四月の比なり」と記している。それは、同地字大下百六十二・百六十三・百六十五の三つの番地にまたがっている（明治二六年六月二一日条）。日記中に記すところによれば吾妻橋の近くで、すぐ近所に成島柳北邸、また隣には榎本武楊邸があった。

その後明治十四年に至って四谷塩町に、さらに十六年六月神田小川町に転宅したが、[2] この向島の邸宅は処分せずもとのままに残して、別荘として用いたものらしい。三つの番地にまたがるといえばその地域の広さも想像されるが、その番地毎にそれぞれ宅地と庭と園とに区分されている。庭には桜・梅・秋海棠・さるすべり・芭蕉・藤棚があり、池には蓮華が開いた。文部省修史局書記官として勤めていたころは、もとからの資産に合せて、俸給・売文等で生活はゆたかであったらしいが、明治十八年三月罷官以後は、しばしば収入の缺乏と倹約を旨とすべきことを記している。それでも常に何人かの召使を置いていた。書斎は別棟にあったが、やや後には、風通しのよい母屋の二階の座敷を用い、それを「書樓」と呼んでいる。

この日記執筆の趣旨に就いて、彼は、前後三度にわたり、巻頭に序の形で述べている。今そのうちの二篇を引く。原漢文は以下すべて私の訓み下し文に改めた。

柳蔭精廬題詠序

千里ノ清流、一抹ノ遠山、白帆碧芦ニ滅没シ、閑鷗烟波ニ遊泳ス、万桜雲ト簇リ、綺羅路ヲ塞グ、涼風水ヲ度り、畫舫岸ニ繫ガル、紅楓林ヲ綴リ幽人杖ヲ曳ク、寒江雪ヲ釣リ、漁翁歌ヲ唱フ、凡ソ墨上ノ勝景、四時之佳趣、収めて凡上ノ物為ル者ハ吾ガ柳陰精廬也、余客歳ヲ以テ官ヲ罷メ、江湖ニ優遊、日ニ文墨ヲ以テ業ト為ス、都門ノ桂玉、衣食ニ奔走セザルヲ得ズ、仍ツテ小川坊ニ居リ、賓客門ニ盈チ、応接ニ暇アラズ、書ヲ著シ沈思セント欲セバ、時ニ精廬ニ抵ルヲ以テ常ト為ス、蓋シ一文一詩ノ成ルハ、即チ墨上風月ノ力居ルコト多シ。偶マ騒人雅客ノ訪臨ヲ辱ウスル有ラバ、必ズ題詠有リ、積ミテ莒筐ニ充ツ、頃者逐次輯録シ、時ニ出ダシテ観覧ス、以テ吾ガ文気ヲ助クルニ足ル、嗚呼余モマタ、浪淘ノ歳月、白髪頭ニ満チ、今年五十有六ナリ、天若シ余齢ヲ賜ラバ、以テ著作ヲ事トセン、此ニ継グ以後、諸友題詠ノ日モ亦益ス多ク、余ノ文筆益ス進マン、将ニ此ノ江山ノ風月ニ媿ヅルコト無ク、名ヲ後世ニ伝ヘントスルモ亦諸友ノ賜也。

明治二十一年十月　　学海居士百川

これは、明治二十四年七月に起稿した「別墅雑録四」の巻頭に置かれているものであるが、執筆成稿したのは、それより約二年八ケ月以前のこととなる。学海はこれに続けて「題詠未ダ完製セズ、聊カ序ヲ作リテ之ヲ日録ノ首ニ置ク」と述べている。「題詠」とは、漢詩をさすのであろうか。詩の代りに、散文の序を巻頭に据えたとの意かと思うが、この末尾一文をふくめて、序その物も旧作に係るものを用いたのであろう。

次ぎは「墨水雑録（二）」の巻頭に置かれているもの。

墨水雑録引

今ヲ距ル二十一年、余始メテ室ヲ墨水柳圃ニ築ク、当時人屋稀疎、田園相接シ、車馬至ラズ、凡ソ吾ガ耳目ニ入ル者、一トシテ画景詩景ナラザル莫シ。既ニシテ数歳、田ヲ埋メテ園ト為シ、樹ヲ剪リテ屋ヲ建ツ。或ハ乃チ魏然トシテ高樓雲宵ニ立ツ。而シテ豪々タル富商、目ニ丁字ヲ識ラザル者モ亦争ヒテ之

ニ倣フ、一幅ノ江村画景ヲ変ジテ、熱鬧市街ノ俗画ト為ス、歎クニ勝フベカラザルカ。然レドモ余ノ住ム所ノ小樓ハ柳圃ニ在リ、幸ニ静寂ヲ得テ読書品画ニ宜シ、亦不幸中ノ幸也。此ノ録、家ヲ神田ニ移シ、此ノ墅ヲ以テ別業ト為セシヨリ来、日ヲ逐ヒテ記録シ、幷セテ得ル所ノ雑文詩ヲ之ニ載セ、積リテ数巻ニ至ル、中ニ間此ノ地ノ変遷盛衰モ亦以テ見ルベシ。独リ一家ノ記載ノミニアラザル也。

明治二十九年三月　　学海居士識

ここには引かなかった他の一篇（明治二十六年七月）をふくめて、その趣旨は一貫して明らである。即ち本宅では来客の応接その他俗用に忙しく、此処に来て沈思著述の時を得、あるいは文友と共に風騒を楽しもうとするにある。しかもその間おのづから時代風俗の変遷の跡を記すことにもなるというのである。

さて、学海はこの日記を別墅に在って記したわけであるが、別墅に彼はいったいどの程度の頻度で出向いたのであろうか。まだ、全巻に就いて詳しく調査していないので、便宜的に、明治十七年と、二十五年、三十一年の三年間について、彼の滞在日をしらべてみた。

明治十七年。

一月　5 6 12 13 19 20 21 29 30
二月　9 10 11 17 18
三月　4 8 9 10 22 23 30
四月　6 7 12 13 16 17 19 26 27
五月　3 4 17 18 19 25 26 31
六月　1 7 8 14 15 21 22 28 29
七月　5 16 17 18 19 20 26 27 28 29 30 31
八月　5 6 7 8 9 10 15 16 17 18 19 20 25 26 27 28 29
九月　20 21 27 28
十月　5 12 17 18 22 29
十一月　2 3 9 16 22 23 26
十二月　3 6 7 13 14 23 24 27 28

明治二十五年（学海六十歳）

一月　11（年頭兄柴浦死ノコトアリ）23 25
二月　3 5 13 14 15 22 23 24
三月　4 5 6 12 13 21 22 23 30 31
四月　8 9 17 19 20 26 27
五月　4 5 13 14 20 21 22 31
六月　6 15 16 17 24 25
七月　3 5 11 12 13 14 20 21 22 23 24 25 26 27
八月　（月初修善寺ニ旅行）9 10 11 12 13 14 15 23 24 25 26 27
九月　5 6 7 8 18 19 20 27 28 29
十月　12 23 24 28 30
十一月　9 10 17 18 19 25 26 27
十二月　5 6 13 23 24 29 30

明治三十一年

一月　（上旬寒冒臥床）8 30 31
二月　9 11 17 18 19 27 28
三月　8 9（28ヨリ四月初旬旅行）
四月　6 7 12 13 14 15 16 20 21 22 23 29 30
五月　7 8 9 16 17 18 19 28
六月　（親戚病歿ノタメ忌）10 11 12 20 22 27 28
七月　6 7 8 16 17～26（コノ間塩原行）28
八月、3 5 22 23 24
九月　2 3 12 13 14 21 22 23 24
十月　1 6 13 14 21 22 23 30 31
十一月　1 9 11 19 21 30
十二月　1 2 13（以後二か月病臥）

右側に傍線を施したのは、一連の滞在を意味する。日記には、「来」「去」と刻明に記すことが多く、また一方前述の無窮会本本宅日記にもこれと対応する記述がある。一例として、明治二十年四月末から五月末までの間両者を左に対照する。

	（韓国本）	（無窮会本）
四月三十日	為児子参宮日、従俗例也。製赤飯贈諸所往来者、余乃至墨水	墨水に至る。此日は貞美宮参とて赤飯を作る
五月　二日	帰去	墨水よりかへる
〃　六日	自小川坊至	墨水にゆく
〃　七日	（外出）復還墨水	
〃　八日	又宿	
〃　九日	去	墨水よりかへりて
〃　十七日	至墨水	墨水に至る
〃　十八日	去帰小川坊	かへる
〃　二五日	自小川坊至	墨水にゆく
〃　二六日	帰去	墨水よりかへる

文中に見える「貞美」は彼の庶子で幼名比狭古。前月三月三十一日に別墅で生れた。母は彼の妾山崎瑞香である。この女性は身分はいわば上女中である。いずれ別稿に於いて詳しく述べたいが、月琴の上手で、詩を作り、おそらく筆耕に従っていたのであろう、学海が「書婢」と呼ぶ美人である。当年二十四歳、学海より三十一歳年少であった。貞美は学海にとっては三男であったが、瑞香にははじめての子である。こういう特別な時期ではあるけれども、それは、学海のこの両種日記の几帳面な記載とはあまり関係がなかろう。

この一事からみても、韓国本によって、学海が別墅に出かけた月日の大様を察することは、出来そうである。

先の表でみれば、学海は別墅に多くて月に五度、少ければ二三度、その度に二三日から四五日ほど宿泊するのが常であったようである。この中、四月と七八月が特に日数が多いのは、四月は別墅の桜花爛漫たる季節で訪れる人も多く、また盛夏は避暑のためである。概してその別墅滞在日数は決して少くはないと言える。

二

さて本書の内容に就いて、ごく概略を述べる。前述のように、無窮会文庫本は、まだ活字に移されていないけれども、しかしそれが近代文学研究の宝庫と目されているほど内容豊富であることは、定評である。

それに準じて、本日記五冊もまた同様であろうことは、まず容易に推察できるであろう。試みに、ここにあらわれる人名を調べると約五百名以上に達し、その中、三度以上にわたって、名の見える人は左の通りである。洋数字はその記載度数。五十音順。

△饗場　篁村　16
青柳捨三郎　3
秋月　韋軒　3
△淡島　寒月　25
△伊井　容峰　8
市川久米八　5
△伊藤　博文　10
伊藤　聴秋　3
稲津　南洋　6
井上　春水　3
岩永　巌山　4
△巌谷　小波　4
薄井　小蓮　3
瓜生　梅村　7
榎本　武揚　8
三遊亭円朝　3
大隈　重信　3
△大槻修二　11
△大槻　文彦　5
大沼　枕山　3
大野秀太郎　5
岡本　黄石　3
△尾崎　紅葉　4
小沢　圭二　3
大野　芝山　6
落合　東郭　3
勝部　五松　6
△川上音次郎　10
△川尻　宝琴　14
△川田　甕江　33
尾上菊五郎　6
木村　康　5
曲亭　馬琴　3
黒田　翠筠　3
黒田　清隆　4
△幸田　露伴　5
後藤　賤屋　18
△小永井小舟　7
小林　椿岳　49
△向山　黄村　4
佐治　済　4
左　団　次　3
佐和　正　10
佐和　東野　6
信夫　恕軒　16
晋　永機　8
末松　謙澄　3
杉浦　梅潭　55
杉山　三郊　21
鈴木　蠹淳　3
関根　痴堂　32
△谷　干城　4
△市川団十郎　9
田村　利貞　6
△徳富　蘇峯　4
鳥井　華村　4
△中根　香亭　3
△成島　柳北　12
△西村　庸斎　4
根来　耐軒　8
浜村　大海　6
浜村　薇山　10
中村　福助　7
△福地源一郎　6
堀田　豁堂　9
星　亨　3
本阿弥光賀　4
本田　種竹　10
尾上松之助　3
前田　円　4
蓑輪　謙海　5
△宮崎　三昧　18
宮本　鴨北　4
△村上　浪六　28
宮崎　璋蔵　4
森田　思軒　4
矢掛　弓雄　3
山田　美妙　3
山本　徳五　3
依田　柴浦　21
渡辺　雄伯　6
渡辺　伯盈　3

なお無窮会文庫には、学海の長男美狹古氏が作成された本宅日記四十四冊中に登場する人物約八〇〇名の索引、稿本『依田学海日記索引』が蔵されているが、右の表の△印は、その索引中に五度以上見える人名である。

また、それ以外の韓国本五冊に所出三度以下の人々の中には、石橋忍月・井上文雄・井上巽軒・岩倉具視・岩谷一六・内田不知庵・大西述・沖守固・尾崎行雄・小野湖山・仮名垣魯文・菊池三溪・岸田吟香・日下部鳴鶴・久保田米仙・小中村清矩・斎藤拙堂・佐々木信綱・重野成斎・野口小蘋・玉松操・千歳米坡・長三洲・土屋鳳洲・坪内逍遙・島井忱・中西梅花・西村茂樹・林述斎・黙阿弥・森鷗外

などのほか、九蔵・家橘など役者も多い。その数は、たしかに本宅

日記には及ばないけれども、それに近いものであることは確かであり、本宅日記が現在なお翻刻されていないことを考えれば、この日記の重要性は、それだけでも明らかである。

しかし、それらの人々も多くの分野に分れており、また、こうした人物以外の学海自身の感想や見聞の集録記載もある。それらをとりまとめて、内容を分類すれば、

一、学海の詩文
二、文学者・文壇人の消息
三、政治関係・旧藩主関係記事
四、社会見聞・雑記
五、家庭・家族に関する記事。

とでもなろう。

以下、それにしたがって、順を追って述べてゆくことにする。

三、学海の詩文

本日記は前述のような趣旨の下に執筆され、単なる日次みの備忘雑記というようなものではなく、むしろ、詩文集といった面影が濃い。

第一は詩である。本日記収載の詩歌の数総計五八八首の多きに達し、その中数首の和歌を除けば、他は漢詩である。その形式は、七言絶句が最も多く、次いで七言律詩・五言古詩・七言三韻律詩のほか、行・引などと冠したものもある。その大部分は学海の自作であるが、かなりの数の詩歌の贈答があり、他人の作もふくまれている。私は詩品の力量に缺ける者ではあるが、秀作も少くないように

は感ずる。これについては、いずれ稿を改めて論じたい。

またそれと共に、まとまった比較的短い散文に題を付け、文字の肩を一段下げて、改まった形で記述することが多い。左にその題名を列記する。（　）内の数字は、明治年月日、＊は書物の序文である。

枇杷引（一七年一一月一六日）
白鷗社約四則（一八・一〇・一九）
題狐妖図（一八・一一・二八）
＊良政府談序（一六・一一・一八）
山岡高歩略伝（二一・七・二一）
与中野香亭（二一・八・一八）
＊露団々序（二一・一二・二〇）
＊烈士血涙序（二二・一・七）
森文部大臣有礼為凶徒所害（二二・二・一三）
西野文太郎伝（二二・二・二二）
為前田圓題娼妓図（二二・三・二〇）
題高山仲縄賑饑餓（二二・四・八）
白刃表誠（二二・九・一三）
来島恒吉伝（二二・一〇・二八）
＊赤穂義士実話序（二二・十一・二四）
＊迷霧序（二二・一二・一七）
奇文欣賞楼記（二三・二・二五～二六）
中村鶴蔵伝（二三・四・一四）
簡杉山三郊（二三・七・二六）（二六・七・一）

＊賤屋家集序（二三・七・二七）
奇文欣賞接記（二三・九・一一）
＊江東紀勝序（二三・八・一七）
津田三蔵・畠山勇子伝（二四・五・二七）
贈書生演劇川上音次郎（二四・七・二五）
益景記（二五・一一・一七）
白頭一跋（二七・七・一七）
梵雲庵記（二九・一二・二〇）
八分亭記（三〇・三・二一）
＊柳北全集序（三〇・四・一四）
与大槻文彦論伊達念海公事蹟書（三〇・四・一七）
復信夫恕軒書（三〇・四・二二）
警吏ニ答フル案・口演（三〇・九・一一）
富夫人浮田氏伝（三〇・十一・六）

なお題名は付いていないけれど、その文体・形式などから、それらに準ずべき作とみるべきものもあって、左の通りである。題は仮りに私がつけたもの。

〔伊藤春畝議長辞職ノ事ヲ論ズ〕（二二・一〇・一六）
〔クルスピー襲撃事件〕（二二・一一・六）
〔堀田公ノ為ニ謝礼文ノ代作〕（二二・十一・一五）
〔読震川文〕（二三・二・二五～二六）
〔稗史野乗ヲ論ズ〕（二三・四・一四）
〔徳富蘇峯ニ寄スル書〕（二五・八・二六）

これらの中の多くは、人から依頼されたもので、露伴の「露団々」の序、「良政府談」の序など他人の著書に序を求められたものが多いが、中には「白頭一跋」の「白頭一」は酒の名であり、醸造元から宣伝用に求められたかの如きものもある。これらは長くて七八百字程度のものであるから、もちろん彼の著作としては、些末なものに過ぎないが、その大部分は日記にのみ留められて、世に公表されることがなかったのであろうか。昭和女子大刊の『近代文学研究叢書』一〇中の学海著作年表には、わずかに左の三篇の名が見える。

題高山彦九郎賑饑民図、国光一巻二号・明治二二年九月
益景記　太陽二巻二四号・明治二九年十二月
柳北全集序　太陽三巻十九号・明治三〇年九月、文芸倶楽部三巻九号・明治三〇年九月

これらすべて、本日記後に発表されたものであること明らかであろう。その間の改稿あるいは推敲の有無やその実態など筆者はまだ調べていない。それぞれ対照比較すれば、それを察することは容易であろう。

また、このように、人から依頼されて書いたもののほかに、政治的・社会的事件に出会って、新聞記事などに基いて経緯を記し、所感を記したものに、前記の森有礼暗殺事件・大津事件・大隈重信襲撃犯人の来島恒吉伝などがある。しかしそれらの記事にうかがえる学海の思想についても、稿を改めたい。

また、学海の述作として見落せないのは、名勝地遊覧記であろう。早く明治十四年には『墨水廿四景記』二冊を刊行して「東橋暁靄」以下「墨堤桜雲」までをそれぞれ絵入りで紹介している。彼自身その序文にいう通り、それは頼山陽ら近世文人に倣ったものだ

が、彼の性癖としても、旅行・遊覧が大好きだったらしい。文部省在任中はその暇もなかったようだが、明治十八年二月罷官になると、その日記に、

此レヨリ間雲野鶴、蓋シ遠ク京洛ニ遊ビ、以テ余年ヲ老イント欲スルノミ

と記し、さっそくそれを実行に移して、その年四月十五日から七月十九日まで、三か月に及ぶ関西各地名勝を遊覧した。本日記には、ただその間訪れた四日市・芳山・須磨・明石・有馬・岐阜・養老の地名を記すのみで、あとは、

事ハ著ス所ノ画夢記蹤諸篇④ニ詳シ（七月十五日条）

と述べるに留まる。また、続いて同年十一月にも十六日～十八日の三日間妙義金洞山に、友人の杉浦梅潭とともに出かけており、後に同年十月、「遊金洞山」と題して、「文明新誌」に発表している。

その後も、この日記には、

明治二三年九月二〇日～二一日、絵島行、瑞香同伴
明治二四年五月八日～一五日、関西・九州地方、妻よし同伴
同二四年八月六～一七日箱根、瑞香同伴
同二九年四月九～一七日関西・中国地方、瑞香同伴
同三一年七月一七～二七日塩原行、瑞香同伴

の各記事が見える。

この中、明治二四年五月の関西・九州旅行については、その年六月から十一月まで九回にわたって「漫游の偕楽」と題して「国民の友」に紀行文を連載している。

右の七篇の紀行文の記述は精粗さまざまであるが、本日記中、特に精細で興味があるのは、明治十八年の金洞山行と明治三一年の塩原行とである。今、後者の一節、七月二十一日条を掲げる。

晴、朝起、例ニ依リ巖湯ニ浴シ散歩ス。天狗巖ヲ過ギテ、小夜河原三島中州に至ル。塩原小記ニ云ハク、澗ニ沿ヒテ西スルコト数町ノ間ヲ小夜河原ト曰フ。西崖相蹙リ、底ニ連リテ皆石ナリ。色ハ灰白ニシテ質滑沢、蓋シ雨潦ノ漲（ママ）溢瀉激、磨礪シテ然ル也。平時之ヲ望メバ、堊壁ヲ峙ルガ如ク、素粉屏風ヲ列ヌルガ如シ。水其ノ下ニ注ギ、奔レバ則チ雪白、渟レバ則チ藍青、深キハ渦トナリ、浅キハ漣トナル。一帯紋氈ヲ展ズルガ如シ、益ス溯リテ益ス奇、怪石離立シ、白哲ノ巨大夫ノ裸ニシテ水ニ浴シテ出ヅル者ノ如シ。仰グ者、俯ス者、首ヲ回ス者、肩ヲ脅ス者、跪踞坐臥スル者、千状万態、神手仏手、殆ド名言スベカラズト。狀ヲ善クスト謂フベキ也。此ノ境大路ヨリ望メバ、径ノ下ルベキ者無シ。因リテ一露店ノ左ヨリ一小路ヲ得、荒草蕪穢、排シテ行ク、巖石ヲ匍伏して潭上ニ至レバ、一巨巖ヲ見ル、踞マリテ焉ヲ窺フ。潭中白石偃臥シ、水触レテ怒ル、洶湧□薄薄スルコト、雪ヲ滾ス如ク、氷ヲ砕クガ如シ。実ニ奇景也。箒溪ハ北ヨリ来ル、洞石屼トシテ繚繞、水勢疾キコト奔箭、浄潔練縞ヲ剪ル。両崖互ニ逼薄シ、激湍稍蹙小ニシテ、相闘ヒテ相降ラズ、号怒シテ争フ。一道石ノ為ニ遮断セラル。触撃乍チ騰矯、飛沫急雨ノ如シ。崖樹翻倒セント欲ス、雪霰冬夏ニ亘リ、雷霆昏曉無シ。絶勝此ノ如キ有リ、遊賞模写セザルヲ悔ユ、須ク画ニ刻スベシ、夢魂落ツルコト杳渺タリ。

前半は「塩原小記」に據るものの、全文躍動して佳文たるを失わない。

なお、前記『学海先生一代記』にはその自画と共に添えられた詞書が興を唆るのであるが、全五九丁のうちその第三十一丁から第五十三丁まで二三図はすべて全国の名勝地の景で、名勝遊覧を好んだ彼の面目が躍如としている。

さらにまた、依田美狹古氏作製の稿本『依田学海年譜』（無窮会文庫蔵）にも、これらの旅行に関する記述が見えるが、それらは、学海談叢・遺稿・学海日録等に據った旨ことわられている。それらの文献は筆者未見のため、確かなことはいえないが、本日記に詳細の記事あるものについては、学海自身日記をもとにして、それぞれ推敲作成したものと推察される。先に述べた短い序記類の場合と同じく、当時雑誌・単行本に発表されたものと本日記の原文とを比較対照することも今後必要なことかと思う。

四

先にも述べた通り、本書には実に数多くの文士・作家が顔を見せており、その言動の記事が本日記の最大の見所となっている。先に森銑三氏らが引かれたのも多くは本宅日記の中に見えるこの種の記事であり、本日記にあっても事情はもとより変らない。当時の文学動向や、又その問題点に就いて、私は不案内ゆえ、ここには彼らの交遊ぶりをうかがわせる興味ぶかい記事の幾つかを掲げるにとどめようと思う。

（明治二六年十一月）十六日　晴　墨水ニ至ル。饗庭篁村ヲ寺島村ニ訪フ。遽カニ篁村トトモニ幸田露伴ヲ訪フ。午飯ス。雨ニ逢ヒテ帰ル。是ヨリ先、篁村・思軒・露伴三子嘗テ根岸ニ飯ス。夜十時往キテ宮崎三昧ヲ訪ハント欲ス。乃チ一瓶ノ酒ヲ買ヒテ其ノ門ヲ叩ク。主人既ニ睡リテ応ヘズ。其ノ酒ヲ門ニ留メテ去ル。謂ヘラク、明朝門ヲ開ケテ之ヲ見テ、必ズヤ驚キテ以テ奇ト為サント。既ニシテ寂然タリ。人ヲシテ之ヲ問ハシムレバ、則チ人有リテ取リ去リ、主人ハ知ラザリシ也。皆大笑ス。是ノ日談此ニ及ブ。各其ノ瓶ノ去リシ処ヲ推シテ之ヲ揣摩ス。諧謔百出。乃チ各一篇ノ小説ヲ作リテ相示サンコトヲ約ス。

（明治十九年七月二十八日）川田甕江来園（中略）、縦談晩ニ至ツテ去ル。甕江財政ヲ婦ニ委ヌ。婦会計ニ密ニシテ、江私ニ一銭ヲ出入スル能ハズ、江筌室（ママ）ノ為ニ其ノ質貨ヲ償ヒ、財ニ苦シミテ余ニ借ランコト求ム。余ノ嚢モ亦渋ク之ニ応ズルコト能ハズ。因ツテ券ヲ書キ甕江ニ授ク、江之ヲ婦ニ取ル、余乃チ為ニ甕江ニ券ヲ書キ之ヲ蔵センコトヲ求ム、互ニ相償フ也。

学海と饗庭篁村・幸田露伴・森田思軒・宮崎三昧あるいは川田甕江らとの愉快な交遊ぶりが如実にうかがえる材料である。

またこういう罪のない逸話とはやや趣を異にして、知友に対する痛切な人物月旦がしばしば見られる。

（明治二十三年七月二十六日）如電言フ、福地桜痴腹心ノ友四人有リ。曰ハク條野伝平、曰ハク松本秀造、曰ハク大沢基輔、其ノ一人ハ之ヲ忘ル。桜痴負債山ノ如シ。積ミテ五万円ニ至ル。其ノ実ハ二万円ニ過ギズ。蓋シ利倍シテ子ヲ生ミ、以テ此ニ至ル。四人之ヲ憂ヘ、一大財主ニ請ヒテ、一洗之ヲ清ガント

依田学海の漢文体日記　―韓国々立中央図書館蔵『墨水別墅雑録』『墨水雑録』について―

シ、桜痴ニ謂ツテ曰ハク、先生宜シク往キテ頰ヲ綏クシ請ヲ嘱スベシ。庶以テ其ノ力ヲ藉サント。桜痴笑ツテ曰ハク、唯ダ卿等善ク之ヲ為サン。吾何ゾ能ハンヤト。此ノ四人之ヲイカントモスル能ハザル也。桜痴ハ他無シ、嗜好酒ヲ飲マズ、烟ヲ喫セズ、唯ダ色ヲ好ムノミ。一日婦人ヲ擁セザレバ猶ホ渇者ノ飲ムヲ得ザルガゴトキノミ。其ノ財ヲ散ジ貧ヲ致ス者悉ク此ガ為ナリト、桜痴嘗テ余ニ謂ツテ曰ハク、僕文字ヲ草スルコト、一夕毎ニ五千余言、一揮シテ成ル、然レドモ十余日ヲ経レバ則チ頭岑々焉トシテ痛ム也ト、蓋シ此ノ時有若哉草紙ノ著世ノ喧伝スル所ト為ル、文才敏妙、縦横万言近世其ノ匹少ナリ、其ヲシテ専ラ文章ニ従事セシメバ豈俄ニ此ニ至ランヤ、惜ムベキ也。

一件、余計な説明は要るまい。

（明治二十三年八月六日）（淡島）寒月ハ愛鶴軒ト号ス。（中略）寒月器識奇福、禅理ヲ喜ビ、井原西鶴ノ著書ヲ愛シ、多ク其ノ書ヲ蓄ヘ、因ツテ以テ号ト為ス。時ニ文字ヲ作レバ西鶴ニ彷彿タリ、幸田露伴・尾崎紅葉皆寒月ニ因リテ始メテ西鶴ノ書ヲ読ムヲ得テ、深ク其ノ人トナリヲ愛ス、寒月ハ家甚ダ富ム、然レドモ四壁蕭然、机上塵積ルコト数寸、破窓紙糊、煤痕墨ノ如ク、以テ意ト為サザルモ亦奇人也。

寒月の蔵書によってはじめて露伴・紅葉が西鶴本に親しんだという事実はすでにかなり有名であるが、ここに記された彼の日常も興味ふかいものがあろう。

（明治二十三年三月十日）改進新聞ヲ読ム、山田美妙草スル所ノ文壇叢話、余ノ事ヲ載スル有リ。辞気容貌、繊悉遺サズ、亦妙手ナル哉。因ツテ憶フ、美妙ノ人物容貌色白ク髪黒シ、常ニ笑容有リ、音吐甚ダ低ク、居動静穏、言ヲ疾シクシ色ヲ遽ニセズ、近時ノ文学諸子中最モ少キ者ハ岩谷季雄渾山人ト為ス、其ノ次ギハ美妙也。

（明治二十六年八月二十七日）（前略）聞ク、石橋忍月夫友嘗テ根岸ニ寓シ、一女子ヲ娶リテ妻ト為ス、岩谷松平ノ義女ニ係ル、其ノ母ハ則チ西園氏ノ妾、松平嘗テ納レテ側房ト為セシ者也。容貌甚ダ美、母子並ニ絶色ヲ以テ聞ユ、忍月喜ブコト甚シ。居ルコト数月、義母曰ハク、女婿債多ク、重キコト邱山ノ如シ、吾女ヲ愛ス、奈何ゾ此ノ無頼漢ニ嫁セシメンヤ、離別ヲ求ムト、一夕席捲シテ去ル、独リ女ノ嫁装ノミナラズ、幷セテ忍月ノ衣物モ皆持チ去ラルト。云ク、又浪六ノ母郷ニ在リ、小学生ノ裁縫教師ヲ業トス。浪六将ニ其ノ居ニ焉ヲ迎ヘントス。而ルニ家ニ食客常ニ五六人居リテ、酒ヲ飲ミ肉ヲ食ヒ、日ニ数金ヲ費ス、浪六禁ズル能ハザル也。負債日ニ増シ、母ヲ迎フル能ハズト云フ。三昧曰ク、少年多ク金ヲ得ルハ災也ト。洵ニ然リ。

山田美妙の才人ぶり、忍月・浪六らの間のぬけたところなど彷彿として、要を得た文といえる。

また学海と成島柳北とはもとから親友の仲で、向島の邸もすぐ隣りで、頻りに往来している。学海は本日記中にも柳北の動静をしばしば記し、明治十七年十一月三十日の彼の死後も、その遺族の様子はスキャンダルに及ぶまでいちいち書き残している。そして、そのもっとも達文と称すべきは、左に掲げる、明治三〇年四月十四日条

に見える「柳北全集序」であろう。

亡友成島柳北、才ニ奇ニシテ文ニ艶ナル者也。三世文学ヲ以テ江戸幕府ニ仕フ。柳北奇才有リ、屢バ有司ヨリ屈セラルルモ、気少シモ撓マズ、幕府多事ニ遭ヒ、一擢騎兵奉行ト為リ、再擢少老兼会計総裁ト為ル。決断流ルル如ク、事ニ留滞無シ。人其ノ顕敏ニ服ス。豈才ニ奇ナル者ニ非ランヤ。戊辰ノ変、王師東下シ、前将軍誠ヲ投ジテ土ヲ献ズ、柳北退イテ野ニ隠レ、朝野新聞社ヲ創ル、時事ヲ討論シ、間加フルニ綺語ヲ以テス、妖嬌濃艶、花笑ヒ鳥歌フ、読ム者魂蕩ケ神動ク「然レドモ柳北ハ独リ才ニ奇ナルノミナラズ、復禍ニ奇ナリ。独リ文ニ艶ナルノミナラズシテ、艶福アリ」(頭欄背入)）蓋シ柳橋ノ月芳原ノ花、一タビ其ノ筆ニ入レバ価百倍セザルハ莫シ。豈文ニ艶ナル者ニ非ランヤ。然レドモ柳北ノ得ル所ハ此ニ止ラザル也。復福ニ艶ニシテ禍ニ奇ナリ。何ヲカ艶福ト謂フ。柳北麻面ニシテ長貌、甚シクハ美ナラズ。然レドモ旗亭ニ酒ヲ呼ベバ、紅粉満座、燕瘦環肥、寵ヲ爭ヒ媚ヲ競ヒ、皆柳北ヲ呼ンデ柳郎ト為シ、其ノ一顧ヲ爭ヒテ栄ト為ス。何ヲカ奇禍ト謂フ。貪官汚吏ハ厳ニ筆誅ヲ加ヘ、忽ニ其ノ怒ニ遭ヒテ獄中ニ投ゼラレ、監禁数十日ニシテ屢バ免サルルヲ得タリ。漫罵深詈毫モ假借セズ、夫ノ滑稽諧謔ノ弁ノ若キモ亦最モ其ノ長ズル所、文字一タビ出ヅレバ、万口爭ヒ伝フ。蓋シ奇艶ノ外ニ於イテ、別ニ一機軸ヲ出セリ。余交ヲ絞ブコト十年、其ノ居ハ墨水別墅ヲ占シテ相距リ、居常往来シテ語ル。其ノ文ヲ読ム毎ニ、未ダ嘗テ傾倒セズンバアラザル也。頃者博文館主人尽ク其ノ遺文ヲ蒐メテ巻ト為シ、名ヅケテ柳北全集ト曰フ。来タリテ序ヲ求ム、嗚呼柳北亡キ後、其ノ居既ニ三度其ノ主ヲ易ヘタリ。余ハ白髪頭ニ満チテ猶ホ筆ヲ執ル、其ノ文ニ序スルモ亦何ゾ幸ナルヤ。乃チ見ル所ヲ書シテ、主人ニ授ク。

以上、僅かに本書の内容の一端を紹介したに過ぎない。余はなお後日を期したい。

〔注〕

1　森銑三氏「露伴伝記資料」露伴全集月報一九号　昭二七年三月
・森銑三氏「学海日録抄」露伴全集月報二〇号　昭二七年五月
・関良一氏「依田学海の日記」国文学昭三九年八月
・小田切進氏「『学海日録』と『小波日記』――近代日本の日記――」群像昭五八年六月
・越智治雄氏「新文学胎動期の依田学海」文学昭和四〇年一〇月など

2　関良一氏、前掲論文

3　依田美狭古編『依田学海年譜』(稿本)および昭和女子大学編『近代文学研究叢書』一〇巻「依田学海」には、この時転宅のことのみ記して、以後向島邸が別荘として使用されたことについては触れていない。

4　刊行されたのは『学海画夢』二冊秩入。明治十八年十月大坂、湯上市兵衛刊。学海自序・谷太湖等序。画は富岡鉄斎・久保田米仙・服部紫紅・十市王祥等二十人。学海自身も一葉画をかいている。画題にある地名は、東台・墨水・勢山・琶琵(湖)・

東山・嵐山・嵐溪・亀山・菟道・南都（以上上巻）、芳山・塔陵（多武峯）、玉祠・桜宮・有馬・馬山・湊川・舞（鶴）湾。

5　明治十六年十一月二十四日条・十八年二月十四日条・十八年七月二十八日条・十九年十月三日条。

（付記）本稿を草するに当って、資料閲覧その他に便宜をお与え下さった韓国々立中央書書館・無窮会文庫の各関係者の方々、また斡旋の労をお執り下さったソウル日本大使館の方々と森田芳夫教授、資料につき種々御尽力下さった松崎仁氏、愼仙香氏、朴喜緒氏に深く感謝の意を表したい。